

知のまち、歩むまち、育むまち 文教都市くになち

「20年後のくになち」検討プロジェクトチーム報告書



平成26年3月

目次

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
第1章 社会情勢と本市を取り巻く状況・・・・・・・・	2
1．人口減少、少子高齢化	
2．価値観の変化、多様化	
3．財政運営状況等	
第2章 ビジョン設定に向けて・・・・・・・・	7
1．生産年齢人口の確保	
2．文教都市ブランド	
3．20年後を見据えたまちづくりビジョン	
第3章 6つの柱・・・・・・・・	10
1．ビジョン具現化のために	
「学びの都・くにたち」の樹立　～知識を吸いこみ、文化を浴びるまち～	
まちとともに輝く子を育てる　～品よく・賢く・元気よく～	
都市と自然が融合するまち並み　～春夏秋冬表情が変わるまち～	
地域資源を活かした交流人口の増加　～まち歩きの名所くにたち～	
世代と立場を超えて育ちあうまち　～顔の見える地域社会～	
新しい行政サービス　～考え、行動する市役所～	
おわりに・・・・・・・・	26
参考資料・・・・・・・・	27
「(仮称)20年後のくにたち」検討プロジェクトチーム設置要綱	
プロジェクトチームメンバー一覧	
市民意見交換会参加者一覧	
会議開催状況	
プロジェクトチームメンバー感想	

はじめに

我が国は今、急速な少子高齢化を迎えています。右肩上がりの時代は終焉を迎え、縮小社会、人口減少社会へシフトしています。これにともなう行政ニーズは日々刻々と変化し、その対応が迫られています。また、東日本大震災によって、私たちを取り巻く環境・社会経済状況は大きく変化を遂げました。さらに、国立市においては、財政改革審議会からの答申や、公共施設マネジメントといった将来にわたる財政運営について検討の必要性にも迫られているところです。

このような市政を取り巻く課題を解決していくため、また、これからの人口減少時代において起こりうる地域間、都市間での競争を勝ち抜いていくため、国立市が 20 年後も持続可能な都市として存在するためには、他市に比べて優位性を持ち「選ばれる」まちとして、立川でもない、吉祥寺でもない独自性のあるまちづくりを行っていく必要があります。

本プロジェクトチームは、20 年後の国立市を見据えた中長期的なまちづくりのビジョンを設定するため、各部からの選出・公募により 20 年後もまだ現役の職員として勤務しているであろう、現在 40 歳以下の若手・中堅職員 15 名で結成されました。発足後、平成 25 年 5 月 17 日の第 1 回会議から同世代の市民との意見交換会も交え、計 15 回の会議を開催し、検討を重ねてまいりました。

会議では、20 年後の国立市を分析すること、リアリティを持ってイメージすること、に時間を割き、その上で目指すべきビジョンと戦略を議論し、本報告書に取りまとめましたので、報告いたします。

平成 26 年 3 月

「20 年後のくにたち」検討プロジェクトチーム

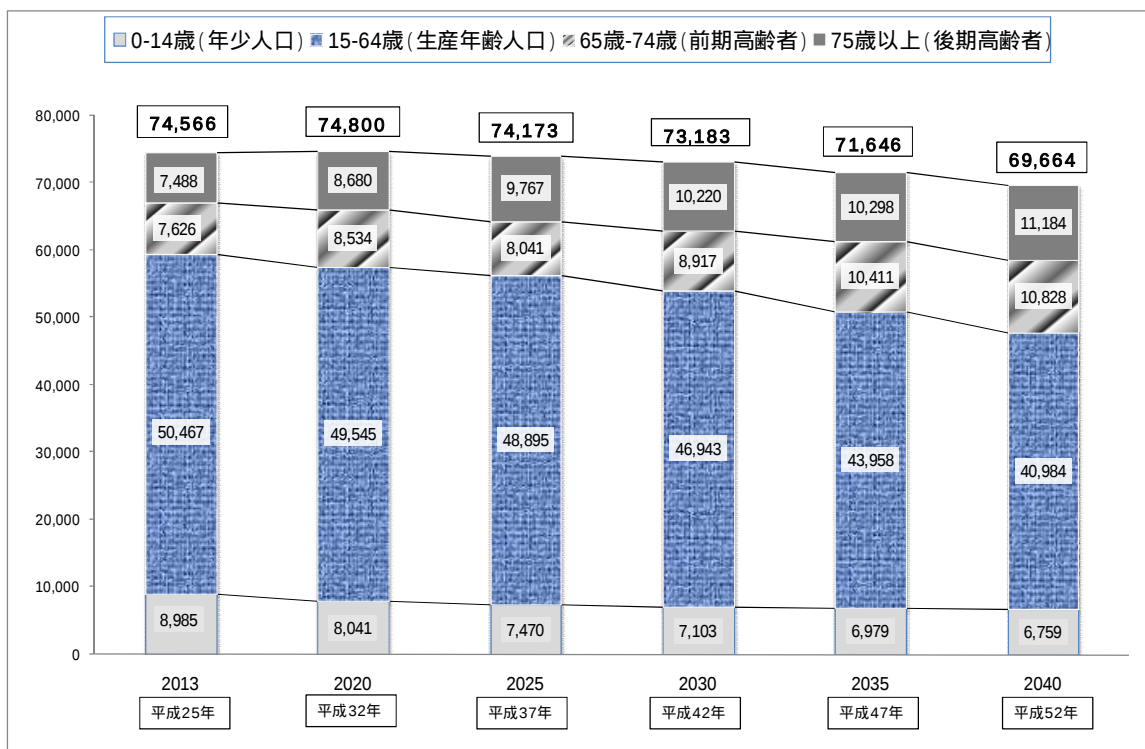
第 1 章 社会情勢と本市を取り巻く状況

1. 人口減少、少子高齢化

我が国はすでに人口減少時代に突入し、急速に少子高齢化が進展しています。本プロジェクトチームでは、おおむね 20 年後である平成 47 年（2035 年）の人口推計を見据えることとしました。

政策経営課による本市の人口推計では、総人口は日本全体の減少スピードに比べると緩やかではあるものの、平成 29 年（2017 年）をピークに減少傾向に進むと見込まれています。高齢化率は平成 40 年（2028 年）には 25%、その 10 年後には 30% を超える見込みとなっており、平成 47 年（2035 年）には 65 歳以上人口が本年に比べ約 37% 増加する見込みです。一方、年少人口は年々減少し続け、平成 47 年（2035 年）には本年に比べ 23% 減となる見込みです。また、国立市の合計特殊出生率は平成 24 年（2012 年）で 1.16 であり（国平均 1.41）、26 市で 6 番目に低い数値となっています。そしてこの少子化に伴い、生産年齢人口も年々減少し、平成 47 年（2035 年）には本年に比べ約 13% 減少すると見込まれています。

国立市の人口推計（政策経営課）



2．価値観の変化、多様化

現代社会は価値観多様化の時代だと言われます。人口減少、少子高齢化は都市の活力の衰退というマイナスの側面を持つ一方で、成熟社会特有の価値観の変化も生んできていると言えます。

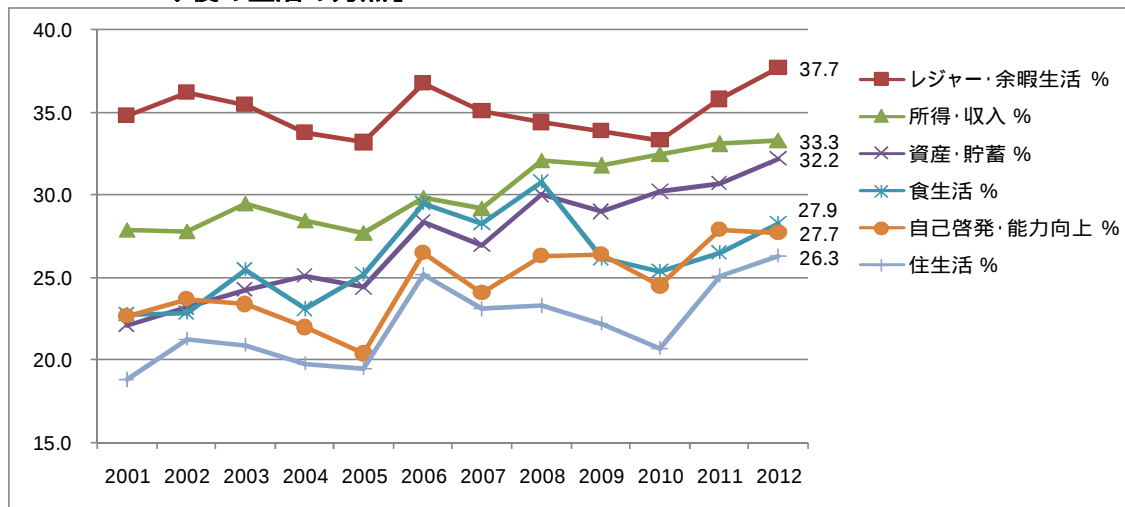
戦後の我が国は、欧米諸国を目標に「追いつけ追い越せ」で量を追い求め、高度経済成長を実現させました。国民は物質的、経済的な豊かさを追い求め、またそれをかなえてきたと言えるでしょう。

しかしながら、高度経済成長の終焉とともに、人々の意識は変化していきます。現代は生活の質、ゆとりなどの精神的な豊かさへと、求めるものが変わって来ます。内閣府の「国民生活に関する世論調査」(平成24年調査)では、「今後の生活の力点」に関する問いに対し、「レジャー・余暇生活」が「所得・収入」や「資産・貯蓄」を抑え、10年以上首位を維持し続けています。また、「これからは心の豊かさか、まだ物の豊かさか」という問いに対しては、1980年代から「心の豊かさに重きをおきたい」という回答が伸びてきており、現在では「物質的な豊かさに重きをおきたい」人のほぼ2倍の数字となっています。

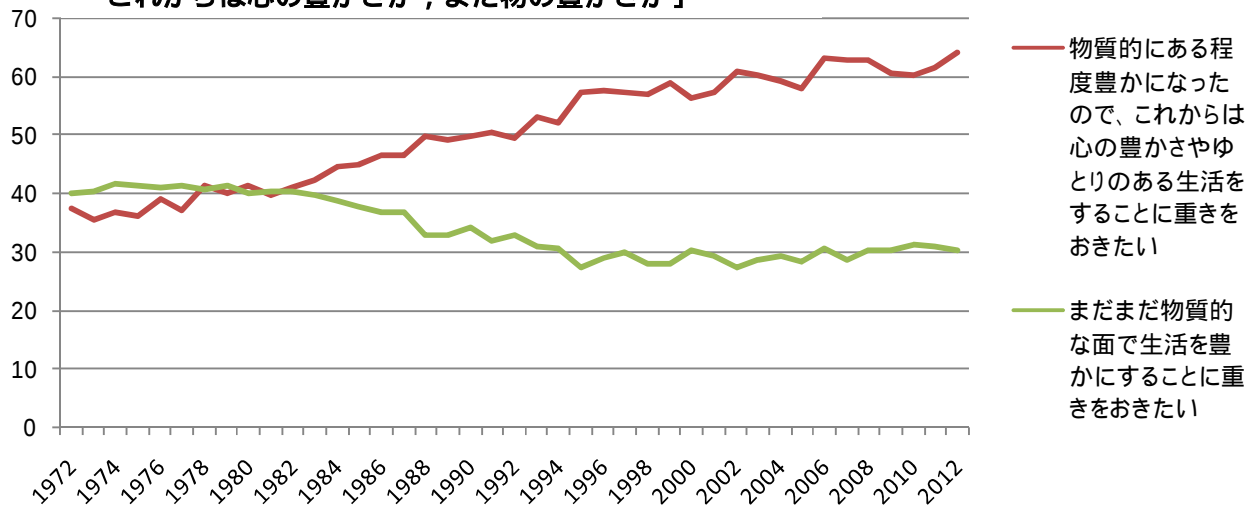
また、発生から約3年が過ぎた東日本大震災は、我が国の社会経済状況や国民の価値観に大きな影響をもたらしました。私たちは改めて自然の脅威を感じるとともに、家族や友人との絆を意識することとなり、原発事故による電力不足により、節電意識や自然エネルギーへの注目が高まりました。国立市においても、「絆シャツ」の作成や、庁舎執務室電灯のLED化、PPSの導入などを実施したことは記憶に新しいところです。同世論調査の「震災後、強く意識するようになったこと」という問いにおいても、「節電に努める」という回答が最も多く、次いで「災害に備える」という防災意識の高まり、そして、「家族や親せきとのつながりを大切にする」や「地域とのつながりを大切にする」、「友人や知人とのつながりを大切にする」という、絆、コミュニティといわれるような項目がやはり多い結果となっています。

こういった価値観の変化は、行政運営の向かう先を今までとは変えていかねばならないことを示唆しています。

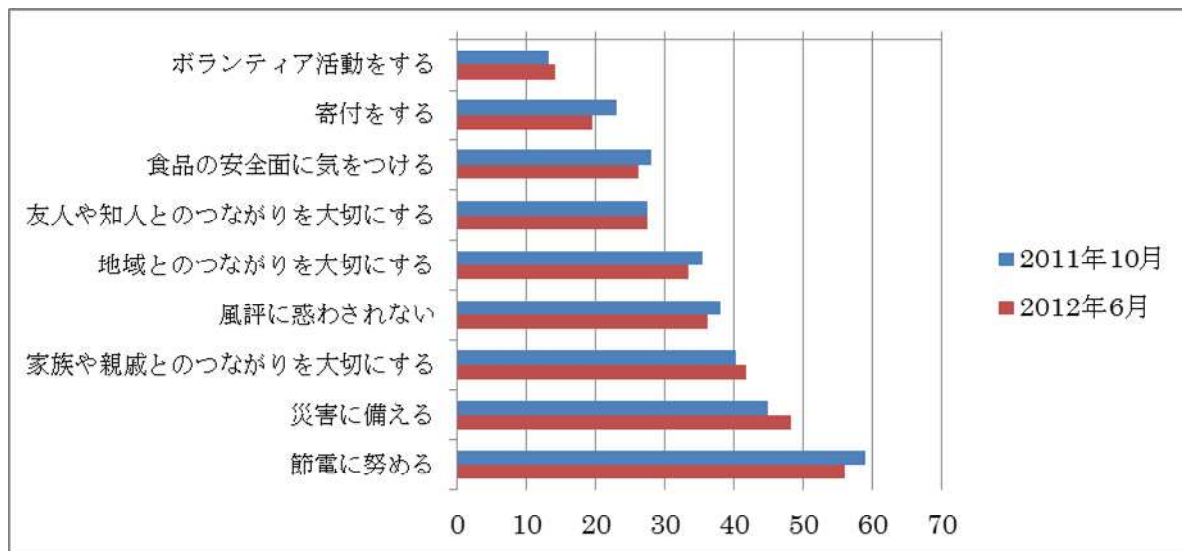
「今後の生活の力点」



「これからは心の豊かさか，まだ物の豊かさか」



「震災後，強く意識するようになったこと」



出展：H24年6月調査「国民生活に関する世論調査」(内閣府)

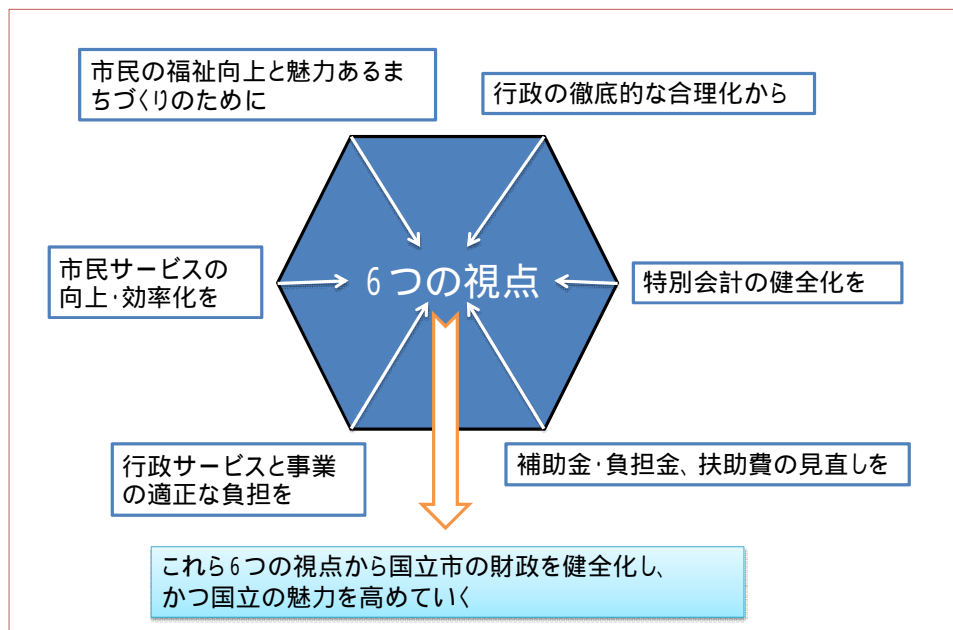
3 . 財政運営状況等

現在の市の財政運営については、非常に厳しい状況が続いています。予算編成においては、臨時財政対策債の借入れや財政調整基金の取崩しにより、赤字補てんをしながら財源確保を行わざるを得ないのが現状です。さまざま行革に取り組んだ結果、以前より改善の方向に向かっているところですが、なお赤字地方債で収支を穴埋めしなければならないことや、平成 24 年度経常収支比率が 99.8%と財政が依然として硬直化していることについては、改善すべき課題であり、安定的で健全な財政運営を行うため、また、将来にわたり市民にとって必要な行政サービスを行っていくため、行政として常に健全化に向けた努力を続けていかなければなりません。

昨年 8 月には、財政改革審議会より最終答申が提出されました。市は、一昨年 8 月の中間答申を受け、平成 25 年度予算において約 4 億円の財政健全化を実施しましたが、最終答申においては、なお約 8 億円の改善という目標が示されています。

また、この最終答申では目指すべきまちの将来像が示され、将来像実現のためには財政健全化が必須である旨が述べられています。先述のとおり、人口減少時代、少子高齢時代においては、財政構造が今後大きく変化していくことは目に見えています。市はこの答申を真摯に受け止め、不断の財政改革を実行していかなければなりません。

加えて、昨年 3 月に策定した公共施設マネジメント基本方針をふまえ、昨今全国的に大きな課題となっている公共施設マネジメントに本市も積極的に取り組んでいく必要があります。現在と同じ規模で全ての施設を建て替えるとする試算では、今後 40 年間で約 450 億円、年平均額で約 11 億 2 千万円が必要になり、現状の予算を確保しても施設全体の約 50%しか建て替えられないとされています。よって、現在の公共施設全てを更新することは、財政的に事実上不可能です。20 年後を見据えたとき、今後の人口減少、少子高齢時代に見合った適正な公共施設のあり方を検討していかなければなりません。



財政改革審議会にて示された「財政健全化に向けた6つの視点」

公共施設三原則

- (1) 施設総量(延床面積)の削減・・・施設の機能を確保しつつ規模を圧縮
- (2) 施設の複合化(多機能化)・・・学校施設を中心とした多機能化
- (3) 施設整備の抑制・・・既存施設の有効活用

公共施設マネジメントの手法

- ・中・長期的な財政計画との連動・・・建て替え費用の平準化、市有土地活用による収入確保
- ・全庁での取り組みと体制整備・・・職員意識の共有、データの一元管理
- ・問題意識の共有と協働の推進・・・市民理解の醸成、PPP(公民連携)の推進

国立市公共施設マネジメント基本方針より【抜粋】

第 2 章 ビジョン設定に向けて

1．生産年齢人口の確保

20 年後の景気動向がどうなっているか。そこまでを完全に読み切ることは不可能です。しかしながら、日本全体が人口減少時代に突入し、また、世界でも例をみない急速な高齢化が進んでいるのが我が国です。第 1 章で述べたとおり、日本全体の傾向に比べると国立市の人口減少スピードは緩やかではありますが、高齢化率は平成 26 年（2014 年）2 月 1 日現在で 21.0%であり、平成 40 年（2028 年）には 25%を突破し、平成 50 年（2038 年）には 30%に達する見込みです。現状では 3.3 人の生産年齢人口で高齢者 1 人を支えています。平成 47 年（2035 年）には 2.1 人、平成 52 年（2040 年）には 2 人を切る見込みです。

このような予測の中では税収の減少、社会保障費の増加により、将来的に市の財政構造が今後大きく変化していくことは避けられない状況です。まず、このことに強い危機感を持たねばなりません。今後、どこの自治体も生産年齢人口の確保、定住人口の増加(維持)を目的とした施策を打ってくることは想像に難くありません。そして、そこに都市間の競争が生まれます。国立市においても、安定した財政運営を行っていくため、また増え続ける高齢者を支えていくためにも、生産年齢人口の確保が至上命題となってきます。生産年齢人口、つまり若者や子育て世代に選ばれる都市となるべく、そこにターゲットを絞ったまちづくりをしていく必要があります。

2．文教都市ブランド

本プロジェクトチームでは、20 年後の国立市をリアリティをもって想像することに時間を割き、現状分析を行いつつ、ワールドカフェやブレインストーミングでメンバー各自が知恵を絞ってきました。都市を取り巻く急激な社会構造の変化や時代潮流の中で、活力ある都市として持続的に発展していくためには、他の都市と比べて「都市としての優位性」が必要です。それをもって「選ばれる都市」となるべく、国立市全体の価値や魅力の向上を図る必要があります。

その議論の過程で、他市にない国立市の良さ、特長で、非常に分かりやすく、知名度もあり、かつ他市が真似できないものが「文教都市」のブランドであるという結論に達しました。この「文教都市」ブランドを活かしたまちづくりを展開し、他市にない独自性を出していくことが、将来に渡り魅力的であり続け、持続可能な国立市を作っていくには必要不可欠です。

“「文教都市」ブランドを活かす”とは、国立市そのものの相対的な価値を向上させることです。これによって「訪れたい」「買いたい」「住みたい」「働きたい」「通いたい」といった意識や行動が喚起され、個別事業への貢献へと結びついていくことが想定されます。市民にとっても、自分の住む街への愛着や誇りへとつながります。

目指すべきは、子どもたちが自分の住むこの国立市を自慢できるまちづくりです。

3．20年後を見据えたまちづくりビジョン

プロジェクトチームでは、上記で述べたとおり、文教都市ブランドを活かし、急速な少子高齢化の進む厳しい社会情勢の中、国立市が都市間競争を勝ち抜ける市、選ばれる市、持続可能な市としていくため

知のまち、歩むまち、育むまち 文教都市くにたち

をビジョンとして設定しました。このビジョンを実現していくことによって、至上命題である生産年齢人口の確保がなされる街づくりが可能となると考えます。

【知のまち】

国立市は学校や大学が多い学園都市です。そのような知的資源を最大限に活かし、質の高い教育や子育て施策を展開していくことや、産・学・官の連携を都市の活力としていくという思いで「知のまち」を掲げました。

【歩むまち】

「歩むまち」には、市域 8.15 km²というコンパクトさを活かし、回遊性のある歩

きたくなる街を目指すという思いを込めています。また、市民とともに歩むまちづくりを行うという意志の表れでもあります。

【育むまち】

「育むまち」には子育てしやすい環境づくりや、人と人とのつながりを作る、絆を育むといった思い、そして、商工業や農業を育てていくという思いが込められています。

これら 3 つを核として、国立市は文教都市であるという誇りを今一度認識し、都市ブランドとして他市との差別化を図ります。市民が市に誇りと愛着を持ち、子どもたちが将来にわたって自慢できるまちをつくっていくためのビジョン、それが「知のまち、歩むまち、育むまち 文教都市くにたち」です。



市の上空にかかる虹

第3章 6つの柱

1. ビジョン具現化のために

「知のまち、歩むまち、育むまち 文教都市くにたち」を目指していくにあたり、本プロジェクトチームは、その柱として、教育、子育て、景観、交流人口増、コミュニティ、行政という6つの分野を設定しました。これからますます行政のおかれる情勢は厳しくなっていく見込みです。「あれもこれも」の総花的な計画を立てることもできますが、今こそ「選択と集中」の戦略的な行政運営を行わなければ、人口減少社会・少子高齢社会を乗り切ることのできる持続可能な市とはなりません。何より、この6つの柱に集中投資をしていくことが、住民福祉の向上へとつながっていくものと、我々は確信しています。

**「知のまち、歩むまち、育むまち 文教都市くにたち」
を支える6つの柱**

「学びの都・くにたち」の樹立 ～知識を吸いこみ、文化を浴びるまち～【教育】
まちとともに輝く子を育てる ～品よく・賢く・元気よく～【子育て】
都市と自然が融合するまち並み ～春夏秋冬表情が変わるまち～【景観】
地域資源を活かした交流人口の増加 ～まち歩きの名所くにたち～【交流人口増】
世代と立場を超えて育ちあうまち ～顔の見える地域社会～【コミュニティ】
新しい行政サービス ～考え、行動する市役所～【行政】

「学びの都・くにたち」の樹立

～知識を吸いこみ、文化を浴びるまち～

戦略の方向性：教育の質の向上

大学等と連携した教育の実施

生涯学習の活性化

芸術的素養を磨く機会の充実

国立市の未来を考える時、教育の視点は非常に重要です。現在、市の教育については、内外から高いレベルにあるという評価をいただいているところで、実際に学力テストにおいても小中学校ともに都内のトップクラスに位置しています。よって、市外からも、国立市の教育環境に惹かれて転入を検討しているという声が多く聞かれます。国立市の教育は、いまや「くにたちブランド」の中核をなすまでに評価されており、今後もさらに伸ばしていくべき分野です。

教育施策の推進はまた、市の活力を生み出します。良好な教育環境を求める親は、すなわち生産年齢人口世代です。さらに、子どもたちは、将来的に地域社会に教育の成果を還元してくれる存在です。

教育という言葉には、学校教育だけでなく、社会教育・生涯学習の視点も含まれます。また、学校教育の視点も、市が直接関与する義務教育にとどまらず、私立や高校、大学にまで視野を広げて考える必要があります。

これら教育の施策を幅広く、力強く展開すれば、20年後、国立市は「学びの都」として確固たる地位を築いていることでしょう。市民や子どもたちは、呼吸するように知識を吸収し、水を浴びるように文化を感じられる。そんなまちを、本気で目指すことこそ、20年後の市の発展に欠かせないと考えます。

教育の質の向上

教育の質の向上に向けて、少子化により児童、生徒数が減少している現状を踏まえ、将来的には学校の統廃合を行います。これにより教育に関する予算の選択と集中を図ります。

また、休校日などに学校施設を利用して、主要教科等の土曜補習、音楽など芸術活動の追加授業、英語やＩＣＴ等の課外授業を導入し、興味・関心を持つ分野の学習機会を作るほか、市の学校教育の水準の底上げを図るため、独自の教員研修を行います。

大学等と連携した教育の実施

学生の活力の創出と大学等との連携促進を目的として、市内の特色ある大学や専門学校による専門性を生かした小中学生向け、市民向けの講座を実施します。

たとえば、一橋大学による市民向けの身近な法律・経済講座や東京女子体育大学による体育の講座、エコール辻東京による料理教室、東京 YMCA 医療福祉専門学校による福祉講座などを定期的の実施することで、学生・市民がともに学びあう機会や地域と学生のコミュニティの創出を図っていきます。

生涯学習の活性化

市民の教育に対する能動性を高め、生涯学習・社会教育という分野についてさらに活気のあるまちを目指します。その新しい第一歩として、ワークショップの種類と開催数を増やし、これまで参加してこなかった市民を呼び込みます。その際に、市内で継続して実施されている事例である「わいがや」や「くにたち富士見台人間環境キーステーション」などのように、学生・若者の力の活用も図っていきます。

また、市でサークルの SNS を作成することで、サークル活動状況の発信、サークル同士のつながりの構築およびサークル活動への参加の呼びかけ等を後押しします。

芸術的素養を磨く機会の充実

芸術をより身近なものとして理解してもらうため、学校をはじめ、様々な地域のコミュニティにおいて、芸術的素養を磨く機会を充実させます。このことによって、子どもの豊かな感性を育み、また、生涯にわたって芸術に親しむことができるよう土台作りを行います。



国立駅周辺に立つ「国立文教地区」看板



一橋大学との包括連携協定調印式にて、互いに手を握り合う山内一橋大学学長と佐藤国立市長。



東京女子体育大学との包括連携協定調印式にて挨拶をする佐藤国立市長



第20回国立市吹奏楽フェスティバルにてともに演奏をする市民と学生

まちとともに輝く子を育てる

～品よく・賢く・元気よく～

戦略の方向性：0～2歳児向け施策の充実

子どもの居場所づくり

治安のいいまちづくりとそのPR

まち全体で子育てする環境の形成

第1章でも触れたとおり、平成24年の国の合計特殊出生率は1.41で16年ぶりに1.4台を回復しました。ただし、東京都は全国平均を大きく下回る1.09であり、国立市は1.16で多摩26市中21番目と、非常に低い数字となっています。

「国立市公共施設等のあり方に関する研究報告」によれば、人口コーホート分析による国立市の人口は、5～9才、10～14才の子ども世代は平成17年から22年にかけて小幅の増加、15～19才及び20～24才の高校生、大学生世代は大きく増加しています。また、30才代、40才代の子育て世代も増加しています。これは居住環境・教育環境の良さを評価した新しい流入層の存在のためと推測されています。

子育てしやすいまちづくりをすることによって、子育て世代が流入し、子どもが流入してきます。生産年齢人口の確保には、子育てしやすいまちづくりが必須です。さらに、子育てしやすいだけでなく、品格があり、賢く、元気のよい、輝くような子どもを育てられる環境づくりを進めることで、積極的に子育て世代を呼び込みます。子どもは地域の宝です。まち全体で子育て環境を整え、いつも輝いている子どもを育てることができるまちをつくっていきます。

0～2歳児向け施策の充実

現在国立市で他市に比べて比較的手薄である0～2歳児向けの施策を充実させます。保護者にとっても利便性の高い子育て施設の充実などにより待機児童数を減らすとともに、ニーズの高い一時・病児・休日保育等の対応を積極的行います。また、「保育コンシェルジュ」の導入を進めるなどの施策により、保護者と子の双方にとって最適な保育環境を目指します。

加えて、「こんにちは赤ちゃん事業」の拡充や保護者交流の促進、近隣の産婦人科情報共有の仕組みづくりなどの施策を行うことで、まちが保護者を支え、ともに子育てできる態勢をつくっていきます。

子どもの居場所づくり

より安全で、健全な青少年の育成に寄与できる子どもの居場所づくりを進める上で、まず既存の公園や児童館等の魅力向上を図っていきます。

例えば公園については、「球技ができる」「遊具が豊富」「ユニークなアートが設置されている」等それぞれ明確な特徴をつくることで差別化を図り、利用の仕方について幅広いニーズに応えられるようにしていきます。利用頻度の低い公園・遊園を魅力ある公園・遊園へとリニューアルすれば、低利用地の活用という課題も同時に解決することができます。

また、保護者の目が届かずとも安全に過ごせる各児童館・学童・放課後キッズのようなサービスについて、より多くの子どもの足を向けられるような魅力的な事業等の実施および学校と協調した周知活動に注力していきます。

治安のいいまちづくりとそのPR

文教都市である国立市は、他市に比べて犯罪発生率が低いという特長があります。その点を子育て世代にアピールし、転入を呼び込む材料のひとつとしての活用を図ります。

また、子どもの安全を守る対策は必要不可欠です。通学路整備や交番誘致を進めるなど、より一層市民にとっても子どもにとって安全・安心なまちづくりを推進します。

まち全体で子育てする環境の形成

子育ての負担を軽減するため、例えば地域の高齢者や他の子育て中の家庭との交流促進や、退職した保育士に一時的に子どもを預ける仕組みづくりなどを進めます。このような安心して子どもを預けられる仕組みを整え、また子育て情報やベビーカーなどの育児用品の交換を目的としたSNSを立ち上げる等、地域の子育てネットワークを形成していきます。

あわせて、市内事業者に協力を依頼し、子連れでも利用しやすい子育て支援店舗の設置や店内の授乳スペース等の周知を図ることで、地域全体で子育てする環境作りを進めていきます。



子ども家庭支援センターの「子育て広場」で遊ぶ親子



くにたち中央図書館にて楽しむ親子



なかよし保育園の遊具で遊ぶ園児たち

都市と自然が融合するまち並み

～春夏秋冬表情が変わるまち～

戦略の方向性：美しい街並みの形成

桜の風景の拡大

大学通りの特徴ある景観の形成

南部の豊かな自然の保護

座標から見た東京都の中心地、ヘソがあると言われる国立市ですが、それと同時に、東京都を大局的に見ると、国立市より東側は都市、西側はまだまだ自然が残っているというある種の分岐点とも言えます。そして、国立市自身も国立駅から広がる大学通りを中心とした優れた景観、閑静なまちなみ、そして甲州街道から南へ広がる、矢川、八ヶ、城山、そして多摩川といった自然が織りなす東京では珍しい都市と自然が融合する、二面性を持ったまちです。

また、国立の看板とも言える大学通りは、春は咲き誇る桜が多くの人の目を楽しませ、夏は活力あふれる新緑に包まれ、秋には銀杏が黄金の輝きを放ち、冬にはイルミネーションが風物詩となるなど、春夏秋冬それぞれ違った表情を見せ、多くの人を惹きつけています。

私たちは先人から受け継いだこれらの美しき景観と、古き良き時代の武蔵野の面影を残す自然をこれからも守り育てていかなければなりません。そして、そのことは年々都市化が進んでいく他自治体とは一線を画した、国立市の素晴らしき特長となっていくに違いありません。

美しい街並みの形成

埼玉県川越市が無電柱化により大きく観光地としての魅力を増したように、国立市も電線類の地中化を推進し、広々とした街並みの実現と景観の保護を目指します。

また、建物の色彩や看板の統一化を行い、自転車駐車場の増設などを通しなお一層の放置自転車削減に取り組むことで、美しい街並みを形成していきます。

桜の風景の拡大

市の木であるイチョウとともにシンボルツリーとも言える桜のある風景を、今後も守り育てていきます。地域で桜の風景を守り、その風景を市内全域に広げることで、桜を守るだけでなく、桜による人とまちのつながりを創出します。

大学通りの特徴ある景観の形成

国立を代表するシンボルでもある大学通りを谷保駅まで統一的に整備することにより、その特長である四季ごとに異なる景観（桜、新緑、イチョウ、イルミネーション）を一体的に形成していきます。

南部の豊かな自然の保護

城山地区を中心として、自然環境を保全する地区を指定することや農地を集約する仕組みづくりなど、積極的な施策を打つことにより、市民の貴重な財産である南部の豊かな自然を守っていきます。



桜のトンネルを形成する春のさくら通り



新緑の大学通りの一角



南部のママ下湧水

地域資源を活かした交流人口の増加

～まち歩きの名所くにたち～

戦略の方向性：文化芸術がある環境の推進

地域資源をつなぎ回遊性を高める

魅力ある個店が育つ仕組みづくり

農あるまちづくりの推進

人口減少時代において、ヒト・モノ・カネの動きを生み出す交流人口を増加させることは、外部からの需要を呼び込み地域経済を活性化させる非常に重要な施策です。多くの人が国立を訪れることで地域が活性化され、多くの人に国立の魅力を知ってもらうことで、定住人口の増加へとつながっていきます。

まずは「くにたちアートビエンナーレ」が起点となり、文化芸術のまちづくりの扉を開きます。コンセプトの1つである「芸術の散歩道」が実現すれば、それはすなわち回遊性へとつながります。国立市はもともと市域が 8.15 km²とコンパクトであり、坂も比較的少なく、大学通りの歩道を代表とする歩きやすいまちです。現在2車線化工事を行っているさくら通りは歩道拡幅と自転車道が整備されます。将来的には甲州街道も2車線化し、歩道を拡幅することを目指します。

また、まちの活性化や交流人口の増加には、商店の活性化が欠かせません。魅力ある個店が数多くそろっていることも国立の特長の1つです。その特長をさらに伸ばすべく、仕掛けを作り、商店を守り育てていく必要があります。

加えて、今後建設予定の「城山さとのいえ」を拠点とした国立独自の都市農業の形を発展させ、体験型農園を整備することにより、交流人口を増やします。

文化芸術がある環境の推進

国立の文化を継承していくとともに、これからの文化を創るため、「くにたちアートビエンナーレ」を通じ人々が文化芸術に触れられる環境をつくります。

地域資源をつなぎ回遊性を高める

市域が 8.15 km²とコンパクトであることを活かし、点在している地域資源を歩きたくなる景観で結び、回遊性のあるまちづくりを推進します。

また、現在事業中のさくら通りの 2 車線化とともに、甲州街道についても将来的な車の減少を見据え 2 車線化し、歩道拡幅を目指していきます。

魅力ある個店が育つ仕組みづくり

商店同士がつながるコミュニティを作り、お互い競争し、刺激し合い、魅力ある個店を育てる仕組みを構築していきます。

農あるまちづくりの推進

楽しみながら農業に触れられる体験型農園や市民農園の充実を図り、子連れのファミリー層などの交流人口を呼び込みます。



芸小ホールで行われた平和ミニコンサート



豊かに実った稲穂と城山



魅力ある個店が集う商店街

世代を超えて育ちあうまち

～ 顔の見える地域社会 ～

戦略の方向性：誰もが地域の一員として相互に助け合う仕組みづくり

地域で出会うための異世代・同世代間交流の促進

小学校区中心のコミュニティ活動の推進

高齢者の新しい活躍の場の創出

国立市の自治会加入率は平成 25 年 5 月現在 34.2%と、非常に低い数字となっています。また、多くの自治会が会員の高齢化という課題を抱えています。近年の少子高齢化や核家族化により市民のライフスタイルや価値観は大きく変わってきました。都市化や高度情報化の進展に伴い、利便性が大きく向上した現代では、地域のことを地域で解決しなければならない機会は減少し、若い層を中心に地域コミュニティ活動に参加する機会が減少し、また動機が薄れてきている状況にあります。

一方で、未曾有の大災害であった東日本大震災は、私たちに家族やコミュニティの大切さを改めて感じさせました。この気づきを大切に、誰もがあたりまえに暮らせる「ソーシャルインクルージョンの地域づくり」を行い、世代や立場を超えた様々な市民同士の交流を活発化させ、市域の狭さを利用した顔の見える地域社会を築きます。

また、コミュニティ活性化の仕掛けとして、子どもを中心として年齢の若い層を地域活動に呼び込めるよう、現在の複層的で分散しているコミュニティ組織を再編して、小学校区中心のコミュニティ作りを目指します。今後、ストックマネジメント事業と連動し、地域の集会施設は小学校区ごとに 1 つ整備し、活動の中心とします。

加えて、世界に類を見ない急速な高齢化の中にあっても、健康寿命を延ばして元気高齢者を増やす施策を行い、高齢者も地域の一員として活躍できる場を提供していきます。

誰もが地域の一員として相互に助け合う仕組みづくり

コンパクトシティの良さをいかし、どのような立場（高齢、しょうがい、ひとり親、核家族、単身）であっても、地域住民として助け合える関係を構築できる施策を展開

します。これにより国立市独自の「ソーシャルインクルージョンの地域作り」を市民と共に目指していきます。

地域で出会うための異世代・同世代間交流の促進

地域で生きがいを見つけられるよう、世代を超えた施策を展開し、人と結びつくことの価値や幸福感を感じられるような交流を目指します。

小学校区中心のコミュニティ活動の推進

小学校区ごとに地域住民が集える場所を提供し、子どもを中心として市民同士や自治会間の結びつきを強められる場面や機会を増やします。たとえば地域ごとの行事や自治会対抗運動会など、コミュニティや自治会を意識できるような企画を実施します。

高齢者の新しい活躍の場の創出

健康寿命を延ばし、元気高齢者を増やす施策を展開します。また、高齢者がこれまでの人生経験をいかし、「働き手」「見守り手」「伝え手」として活躍できる場を提供します。高齢者が自分たち自身の事と地域にどのように参画していくかを話し合う場を設置し、提案された案を行政が施策として検討する仕組みを作ります。



さくらフェスティバルにて昔のあそびを楽しむ高齢者と子どもたち



南部の田んぼで行われたイベント「くにたちどろまみれ」でともに遊ぶ地域の大人と子ども



ゲートボール・フライングディスクなど様々なスポーツを楽しみ、活躍する高齢者やしょうがい者の皆様

新しい行政サービス

～ 考え、行動する市役所 ～

戦略の方向性：シティセールス意識の向上

時代に合った情報の発信

市民ニーズを踏まえたストックマネジメント

横断的取組みによる職員対応力の強化

今後 20 年間の新たなまちづくりを考えると、私たち行政も新たな展開や転換をしていく必要があります。市民ニーズが多様化していく中、時代とともに、市民とともに歩み、考え、行動する市役所へと転換を図る必要があります。

まずはこれまで以上に職員 1 人 1 人がシティセールス意識を向上させ、国立市の魅力、ブランドを積極的に内外にアピールし、市のイメージアップを図ります。また市民に対しては市の情報を積極的に広報し、積極的に地域に入り新たな市民ニーズを吸い上げていきます。情報発信に際しては、その時代時代のニーズを見極め、また時代にあったツールを使用し、戦略的に行っていきます。

また、現在取り組んでいるストックマネジメント事業については、市民サービスを低下させずに必要な機能を維持すべく、計画段階から実行段階へと着実に歩を進めていきます。

そして、「知のまち、歩むまち、育むまち 文教都市くにたち」を具現化していくため、職員資質の向上は不可欠です。複雑化する行政課題に対し、横断的に取り組んでいけるよう、普段から対応力の強化を図り、市民の信頼を得ることができる市役所を作っていく必要があります。

シティセールス意識の向上

職員として国立市の P R を推進し、市の良さを対外的に周知していく取り組みを実施していきます。また、職員の地区担当制を導入し、担当する地区に出向き行政への理解を深めてもらうと同時に、市民生活の現状やニーズを吸い上げ、政策や事業に反映していく仕組みを作ります。

時代に合った情報の発信

市民に必要な情報を正確に伝えていくために、市民目線での情報発信を目指します。また、その時々にあった情報ツールを利用し、市民ニーズに合致した形での広報活動を内外に行います。

市民ニーズを踏まえたストックマネジメント

施設の複合化や使用用途の柔軟な変更など、適正配置、規模の調整を行い、今後策定する予定の（仮称）公共施設再編計画を着実に実行していきます。また、時代のニーズに合わせた資産活用を進めていきます。

横断的取組みによる職員対応力の強化

庁内での横断的な取り組みやプロジェクトを増やし、職員の横のつながりを一層強め、組織としての対応力の強化を図ります。また、どの職員の対応であっても市民にとって満足感の得られる市役所を目指します。



旧国立駅舎再築等のため、市への寄附（ふるさと納税）を呼びかける facebook ページ



大学通りで子どもと触れ合う国立市観光まちづくり協会マスコットキャラ「くにニャン」

知のまち、歩むまち、育むまち 文教都市くにたち

「学びの都・くにたち」 の樹立（教育）

～知識を吸いこみ、文化を浴びるまち～

教育の質の向上

大学と連携した教育の実施

生涯学習の活性化

芸術的素養を磨く機会の充実

まちとともに輝く子を 育てる（子育て）

～品よく・賢く・元気よく～

0～2歳児向け施策の充実

子どもの居場所づくり

治安のいいまちづくりとそのPR

まち全体で子育てする環境の形成

都市と自然が融合する まち並み（景観）

～春夏秋冬表情が変わるまち～

美しい街並みの形成

桜の風景の拡大

大学通りの特徴ある景観の形成

南部の豊かな自然の保護

地域資源を活かした交流 人口の増加（交流人口増 加）～まち歩きの名所くにたち～

文化芸術がある環境の推進

地域資源をつなぎ回遊性を高める

魅力ある個店が育つ仕組みづくり

農あるまちづくりの推進

世代を超えて育ちあうま ち（コミュニティ）

～顔の見える地域社会～

誰もが地域の一員として相互に助け合う
仕組みづくり

地域で出会うための異世代・同世代間交
流の促進

小学校区中心のコミュニティ活動の推進

高齢者の新しい活躍の場の創出

新しい行政サービス （行政）

～考え、行動する市役所～

シティセールス意識の向上

時代に合った情報の発信

市民ニーズを踏まえたストックマネ
ジメント

横断的取組みによる職員対応力の
強化

おわりに

本プロジェクトチームは、各部からの選出・公募により 20 年後もまだ現役の職員として勤務しているであろう、40 歳以下の若手・中堅職員 15 名で結成されました。本報告書でも一部触れましたが、このような庁内での横断的な取り組みやプロジェクトは、職員同士の横のつながりを一層強め、組織としての対応力の強化につながると考えております。よって、このような機会を与えられたことに、チーム一同心から感謝いたします。

国立市の高齢化率は、本年 2 月 1 日に 21.0%に到達し、ついに、いわゆる「超高齢社会」へと突入しました。高度経済成長時代の象徴でもあった、1964 年の東京オリンピックから 50 年の節目である本年、我が国は、世界でも類を見ない急速な少子高齢化の進展に直面しています。

しかし、どんな厳しい社会情勢であっても、基礎自治体である市は、市民にもっとも身近な行政として持続していかなければなりません。激変する社会情勢をふまえ、その中で「20 年後のくにたち」が輝いているためにはどうすればよいかを、本プロジェクトチームでは真剣に議論してきました。そして、20 年後も持続可能な行政運営を行い、他市に比べて優位性を持ち「選ばれる」まちとして存在していくため、「知のまち、歩むまち、育むまち 文教都市くにたち」のビジョンを掲げ、6 本の柱の戦略を打ち立てました。この柱を実行に移していくことが、市の輝く将来に欠かせないと信じています。

プロジェクトチーム自体の活動はこの報告書をもって解散となりますが、20 年後に振り返った時、このことが間違いではなかったと思えるよう、今後も継続して関わり、実現のために努力していきたいと考えております。よって、今後、平成 28 年度にスタートする新たな基本構想、基本計画の策定過程において、この報告書が活かされていくことをプロジェクトチーム一同心より願い、結びの言葉といたします。

参考資料

- 「(仮称)20年後のくにたち」検討プロジェクトチーム設置要綱
- プロジェクトチームメンバー一覧
- 市民意見交換会参加者一覧
- 会議開催状況
- プロジェクトチームメンバー感想

「(仮称) 20年後のくにたち」検討プロジェクトチーム設置要綱

(設置)

第1条 20年後の国立市を見据えた中長期的なまちづくりのビジョンを設定するため、国立市プロジェクトチームの設置及び運営に関する規程(昭和51年7月国立市訓令(甲)第15号)第3条第1項の規定に基づき、「(仮称) 20年後のくにたち」検討プロジェクトチーム(以下「チーム」という。)を設置する。

(任務)

第2条 チームは、次に掲げる事項(以下「プロジェクト」という。)を所掌し、その成果を市長に報告する。

(1) おおむね今後20年間に国立市が目指すべきまちづくりビジョン「(仮称) 20年後のくにたち」(以下「ビジョン」という。)を設定すること。

(2) ビジョンの設定に向けた調査研究に関すること。

(3) 前号に掲げるもののほか、ビジョンの設定に関して必要な事項

(編成)

第3条 チームは、15人以内をもって組織する。

2 メンバーは、平成25年4月1日現在で40歳以下の職員の中から、政策経営部長の推薦により、市長が任命する。

(任期)

第4条 メンバーの任期は、ビジョンを設定し、これを市長に報告した日をもって終了する。

(庶務)

第5条 チームの庶務は、政策経営部政策経営課において処理する。

(委任)

第6条 この要綱に定めるもののほか、チームの運営について必要な事項は、チームのリーダーが定める。

付 則

この訓令は、平成25年5月16日から施行する。

「20年後のくにたち」検討プロジェクトチームメンバー一覧

氏 名	所 属		
(チームリーダー) 櫻井 吾郎	行政管理部	職員課	給与厚生係
(サブリーダー) 吉田 徳史	健康福祉部	福祉総務課	相談保護係
渡部 真大	政策経営部	秘書広報課	秘書・広報担当
水口 知子	政策経営部	収納課	管理係
島崎 健司	行政管理部	総務課	契約係
畠山 雄一郎	行政管理部	情報管理課	文書法制係
村上 祥千	行政管理部	職員課	人事・人材育成係
柿野 夏希	健康福祉部	福祉総務課	庶務係
塚本 まゆら	子ども家庭部	児童青少年課	保育・幼稚園係
外立 健治	生活環境部	産業振興課	商工観光係
浪越 幸志	生活環境部	産業振興課	商工観光係
吉田 健太郎	都市整備部	都市計画課	都市計画係
志村 裕之	まちづくり推進本部	南部地域整備課	用地担当
高橋 正之	教育委員会	教育総務課	教育総務係
前川 綾香	議会事務局	議会事務局	議事係

(所属は発足当時)

事務局：政策経営部 政策経営課

特命担当課長 黒澤 重徳

政策経営係長 脇領 広

主査 松原 謙

高橋 壮一

赤尾 政則

「20年後のくにたち」検討プロジェクトチーム会議開催状況

回	日時・場所	テーマ	内容
第1回	平成25年5月17日 午後2時30分～5時 第3・4会議室	発足	・自己紹介 ・副市長講話 ・サブリーダー選出 ・ワールドカフェ 「立川でもない、吉祥寺でもない、20年後のくにたち」
第2回	平成25年5月24日 午前9時～11時 第1会議室	20年後 のイメージ 醸成	・事前課題「20年後を想像（創造）する」確認・集約 ・「20年後のくにたち」に関する議論
第3回	平成25年5月31日 午前9時～11時15分 第3・4会議室		・事前課題「『20年後のくにたち』実現に向けたアイデア・事業案」のまとめ
第4回	平成25年6月11日 午前9時～11時10分 第1会議室	統計データ の検討	・データから見る国立市の現状と今後の分析・検討
第5回	平成25年6月19日 午前9時～12時 第1・2会議室		・「20年後のくにたち」から考えるストックマネジメントの検討
第6回	平成25年6月28日 午前9時～11時 第1・2会議室	全体概念 名称 施策体系（柱） 戦略 の検討	・施策の柱について
第7回	平成25年7月8日 午前9時～12時 第3会議室		・施策の柱について ・柱ごとの詳細について（グループ検討）
第8回	平成25年7月16日 午前9時～12時 第3会議室		・柱ごとの詳細について（グループ検討） ・全体概念・名称について
第9回	平成25年7月30日 午前9時～12時 第3・4会議室		・全体名称について ・柱の個別戦略の詳細検討（グループ検討）
第10回	平成25年8月5日 午前9時～12時 第1・2会議室		・全体名称について ・柱の個別戦略の詳細検討（グループ検討）

回	日時・場所	テーマ	内容
第 11 回	平成 25 年 8 月 15 日 午前 9 時～ 12 時 第 3・4 会議室	戦略検討	・柱の個別戦略の詳細検討（全体検討）
市民意見 交換会	平成 25 年 9 月 2 日 午後 7 時～ 9 時 第 1・2 会議室	同世代市 民との 意見交換	・ワールドカフェ ～ 20 年後のくにたち～ （参加市民数：27 名）
第 12 回	平成 25 年 9 月 13 日 午前 9 時～ 11 時 10 分 第 4 会議室	市民意見 交換会の 意見反映	・市民意見交換会の振り返り、意見共有等
第 13 回	平成 25 年 12 月 27 日 午後 1 時 15 分～ 3 時 30 分 第 3・4 会議室	報告書 検討	・報告書（素案）の検討
第 14 回	平成 26 年 3 月 20 日 午前 9 時～ 11 時 第 1 会議室		・報告書（案）の検討



第 11 回プロジェクトチーム会議の様子

「20年後のくにたち」市民意見交換会の様子

20歳～40歳の、プロジェクトチームメンバーと同じ世代の市民の方に市報やツイッター等を通じて呼びかけ、合計27名の市民の方にお集まりいただきました。

はじめに、それまでプロジェクトチームで検討してきた内容を簡単にご説明した後、ワールドカフェ方式で自由に意見交換を行いました。市職員がホストとしてテーブルに残り、市民の方には自由にテーブルを動いてもらうかたちとしたことで、本当に様々な市民の方からご意見をうかがうことができ、大変有意義で実のある意見交換会となりました。市民の方から、同様の機会があればまた参加したいとの声が多く聞かれたことが、この会の成功を示していると感じています。

いただいた意見はその後のプロジェクトチームの会議で共有し、報告書への反映を図りました。

ご参加いただきました皆様、誠にありがとうございました。

会場の様子



↑会場全体：大変多くの方にお集まりいただきました。



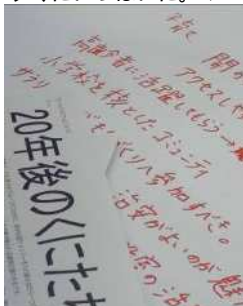
←皆様、真剣に「20年後のくにたち」について考えていらっしゃいました。

→
当日はワールドカフェ方式で意見交換を行いました。出てきた意見はほとんど模造紙にメモしていきます



↑ほかの方の話を一生懸命に聞く職員と参加者。いただいたご意見は報告書に反映し、また職員個人の糧ともなりました。

意見をメモする模造紙はすぐにいっぱい。↓



楽しそうにアイデアを語る参加者の方。ユニークなアイデアや効果的な事業案をたくさん出していただきました。→



プロジェクトチームメンバー感想

◆ チームリーダー 職員課 櫻井 吾郎

40 歳以下の若手・中堅職員 15 名で結成されたプロジェクトチームも回を重ねるうちに徐々に議論が深まっていき、このような報告書が完成しました。20 年後の予測をしながら国立市が目指すべき方向性を議論することは非常に難しい議論でした。しかし、多様な価値観を持ったメンバーが同じ方向性を向いて議論したことにより、一つのビジョンを設定することができました。ビジョンの設定で終了してしまうのではなく、20 年後にこの報告書のイメージに国立市が近付いていけるよう、職員として業務を遂行していきたいと思います。

◆ サブリーダー 福祉総務課 吉田 徳史

「20 年後のくにたち」のビジョン作りにおいて、私たちメンバーがこの街を好きになる、この街で働くことに誇りを持つことが原動力だと思いました。14 回にわたる会議では、20 年後も共に働く仲間たちと「未来のくにたち」を語ることは非常に夢がありわくわくしました。ただし、20 年後をイメージしただけではこの報告書は具現化できません。今の 1 日 1 日を未来を見すえながら私たち職員が努力を積み重ねることが大切だと思います。40 歳以下の職員の「勢い」と「柔軟な想い」で作られたこの報告書が未来のくにたちの発展につながることを願っています。

◆ 秘書広報課 渡部 真大

この検討プロジェクトチームを通じて、市民の方々とともにくにたちの将来を考える機会をいただきました。民間、あるいは住民目線のご意見にハッとしたのと同時に、20 年後のくにたちへの視線の方向は私たちと同じであるということを感じました。国立市職員として今後の 20 年を過ごしていくうえで、大変貴重な経験をさせていただいたと思っております。

◆ 子育て支援課 水口 知子（発足当時 収納課）

日々目の前の日常業務に追われていると、市の職員であるにも関わらず、国立市について、国立の将来について考えるということをしなくなってしまうと思います。今回こういったプロジェクトのメンバーになったことで機会を与えられたことを嬉しく思います。20 年後という設定が故に時代背景を推測するしかできず、具体的な施策にしていけないものか難しく思うところもありました。しかし、20 年後という設定が故に自分達の考える理想も詰め込むことができたと思います。

◆ 総務課 島崎 健司

今回、20 年後のくにたち検討プロジェクトチームに参加し、「子育て」・「教育」をテーマに、より充実した町づくりについてグループで検討しました。まず、国立市が今後目指す子育てのヴィジョンは、子育て世代・富裕層を呼び込み、地域全体で子育てを支援して、品よく・賢い、個性輝く子供が育つような環境整備を目指すこととしました。次に、教育の分野では、学校教育、社会教育の更なる拡充を目標に議論しました。こうした教育分野の活性化が、市民の知識の獲得と市の文化の向上に寄与すると考えたためです。

これらの議論が今後のまちづくりに活かされるよう、私自身も一層、市の発展に貢献していきたいと考えています。

◆ 情報管理課 畠山 雄一郎

まず、このような機会を与えてくださり本当にありがとうございました。

このプロジェクトでは、職員として未熟な身ながら、熟考を繰り返し、疑問に思ったことは声に出して、少しでも実りを生み出そうと尽力させていただいた次第です。このプロジェクトを経て、やはり国立市は面白いところだと再確認しました。国立市の美しさ、高いポテンシャルをより引き出せるよう、これからも一生懸命職務に取り組む所存です。

◆ 職員課 村上 祥千

くにたちは、人や自然、ブランド力など、お金では買えない、かけがえのない宝物をたくさん持っています。この宝物をどう生かしていくかが、「20年後のくにたち」を検討していくうえでの重要な課題となりました。

この「20年後のくにたち」PTは、メンバーの多様な価値観やアイデアを詰め込み、ひとつの大きな雲ようになって同じ方向を目指して進んできました。この大きな雲＝ビジョンから、くにたちという街に潤いと活気をもたらす雨を降らし、くにたちの未来を創っていきたいと考えています。

◆ 福祉総務課 柿野 夏希

随分先に思えた「20年後」という響き。しかしその理想を現実にする為こなすべき課題をあぶりだし逆算すると、今すぐにでも取り組まねばならないことばかり。今の業務への取り組み方が、市の将来を左右するということを改めて実感しました。また、同世代の職員や市民の方々の、積極的に議論する姿勢に大変刺激を受けました。今後は、市政についての知識を深めることはもちろん、市内を歩く機会を増やすことで広い視野を持てるようにしていきたいと感じました。

◆ 児童青少年課 塚本 まゆら

理想的な未来を思い描くことが苦手な自分は、「20年後の国立」という大きい課題を前に、当初すっかり途方に暮れてしまいましたが、チームで議論を重ね、周囲に助けられるなかで、1年弱この課題を考え続けることそのこと自体が、何より自分自身の成長につながっていったと改めて感じています。短い時間のなかで、過去と現状をどれだけ分析できたか、不安も残りますが、10年後、20年後読み返した時に、2013～2014年を感じられる内容になっていればと思います。

◆ 産業振興課 外立 健治

今後、少子化や高齢化により、多くの社会的課題や問題が生じてきますが、20年後の国立市では他市との差別化を図っていくために国立市独自の魅力やブランド力をさらに磨きをかけ、今の子どもたちが将来に誇りに思える、また自慢にできるまちづくりを目指して、市民だけでなく多くの方から国立市に住みたい、住んでよかった、訪れたいと言われるような魅力あるまちづく

りを地域と一緒に進めていく必要があると今まで以上に感じました。

今回このプロジェクトに参加でき、とてもよかったです。皆様お疲れさまでした。

◆ 産業振興課 浪越 幸志

20年後の国立について議論していく中で、若い職員が新しい発想で行政をリードしていくことの重要性を感じました。仕事をしている中でも感じたことですが、街に暮らし街づくりを積極的に進めようと頑張っている若者が市内に多くいることを知りました。我々職員もこのような会議で将来について議論し、市民と一緒に街づくりを進めていかなければいけません。そのためには、今回行ったような市民との交流会を今後も継続して開催し、腹を割った話し合いをすることが重要だと思いました。

◆ 都市計画課 吉田 健太郎

20年後...遠いけど近い、長いけど短い、最初に聞いた時そんな印象を受けました。昔を振り返れば目まぐるしい変化があり、過去の遺産に敬意を表しながらも時代の潮流にあらがわず柔軟な発想が必要であると感じました。市民、会議メンバーとワールドカフェ方式による自由な意見交換を行ったことで、個の考えを共有し、そのイメージを表現できたのではないかと思います。

◆ 南部地域整備課 志村 裕之

本プロジェクトチームに参加することにより、あらためて現状の国立市の良さを確認できた一方で、財政問題をはじめとする各種課題を深く認識することができた。本報告書にある20年後の国立を現実のものにするためには、現状の課題への対応に加え、少しずつ20年後に向けた歩み(具体的には年平均で5パーセント!)を進めていかなければならない。容易なことではないと思うが、先を見据えつつ、今の公務に励みたい。

◆ 教育総務課 高橋 正之

最初は、自分の20年後も考えられないのに・・・と思ったのですが、メンバーの自由で前向きな雰囲気に助けられました。「20年後のくにたち」へ向かって、いろいろなことが、変化していくと思いますが、変化することをおそれず、ちょっとだけ無理だと思えることにも、挑戦していきたいと思えるようになりました。

◆ 議会事務局 前川 綾香

市民との意見交換会で、「都市間競争を勝ち抜くとは具体的にどういうことか?」という質問が出て、答えに窮した経験があります。俗っぽい言い方をすると、生産年齢人口の確保や税収の増加ということになるのですが、私たちが議論してきたのは、国立のよさとは何であり、その特長をいかにして伸ばしていくかということだったように感じています。すなわち、皆が住みたいと思える自治体にしていくこと。これが私たち国立市職員の使命であると改めて感じました。



「20年後のくにたち」検討プロジェクトチーム
報告書

平成26年3月

事務局 政策経営部政策経営課政策経営係 内線223